

まえがき——著者と著作

意識の物理性と向き合う

わたしは幼い頃から、自分の心とは何か、またそこから類推して、自分以外の人の心とは何かについて思いを巡らしていた。こしらえた語呂合わせ、思いついた数学的な発想、犯してしまった言い間違い、頭に浮かんだ興味深いアナロジー、そんなことを理解しようとしていたのを今でも覚えている。自分が女の子だったらどうなるかとか、別の国の言葉のネイティブスピーカーだったらどうなるかとか、アインシュタインだったらどうだろうとか、犬だったら、鷲だったら、挙げ句には蚊だったらどうだろうなどと考えたりもした。そういうことを考えるのは、概ね楽しい経験だった。

ところが一二歳のとき、家族に大きな不安がのしかかった。両親はもちろんのこと、七歳の妹ローラも、わたしも、厳しい現実と向き合わざるを得なくなった。一番下の妹、まだ三歳のモリーに深刻な問題があることがわかったからだ。何が原因なのかは誰にもわからなかったが、モリーは言葉を理解せず、話すこともできなかった（今でも彼女は話ができません、その理由はわかっていない）。彼女はやすやすと、しかも優雅に魅力的に日々を生き抜いているが、何一つ言葉を使わない。とても悲しいことだ。

両親は、脳外科手術の可能性も含めて、何とかしてやれないものかと何年もあらゆる手を尽くし、治療法、

あるいはせめて何らかの説明を求めて、切実な気持ちを募らせていった。わたしは、モリーの苦境を思って心を痛め、誰かが幼い妹の頭を開いてそこに詰まっている謎めいたものをじっと見つめるという恐ろしい想像をしたのをきっかけに（結局、この方法には手を出さなかった）、人の脳に関する一般向けの本を二冊ほど読むに至った⁽¹⁾。その読書は、わたしの人生にとっても大きな影響をもたらした。それによって、意識の物理的基盤と「私」であること——あるいは「私」をもつこと——の物理的基盤について、初めて考えざるを得なくなったからだ。わたしは「私」のおかげで、途方に暮れ、めまいを起こし、とてつもない薄気味悪さを覚えた。

ちょうどその頃、わたしは高校卒業前で、オーストリア^{II}ハンガリー帝国生まれの偉大な論理学者、クルト・ゲーデルが発表した神秘的な超数学の新定理と出会い、時を同じくして、スタンフォード大学の古びたエンシーナ・ホールの、人目につかず居心地の良い地下にあった唯一のコンピュータ「バローズ220」を使って、プログラミングについて学んでいた。わたしは瞬く間にその「巨大な電子頭脳（Giant Electronic Brain）」の虜になった。電子頭脳は、見たこともない不思議なパターンでオレンジ色のライトを明滅させて「考え中」であることを示し、指示に従って美しく抽象的な数学的構造を発見したり、わたしが勉強中のさまざまな外国語を用いて気まぐれで意味のない文を作ってみせたりした。またその頃は、記号論理学に夢中になりかけていた時期でもあった。記号論理学の不可思議な記号は、真、偽、仮言、可能性、反事実性を反映しながら、見たこともない不思議なパターンでダンスをした。それを学べば、人間の思考の裏に隠された水源を奥底まで覗き込むこともできるはずだった。記号と意味、パターンとアイデア、機械と精神構造、神経インパルスと死すべき魂について、とめどなくあれこれと考え続けた結果、青年期のわたしの心／脳は、大混乱をきたしてしまった。

蜃気楼

一六歳か一七歳の頃、そうした渦巻く雲のような考えに、知性の面でも感情の面でも取りつかれて物思いにふけていたある日、ふとわれわれが「意識」と呼ぶものはいわば蜃気楼なのだと気づいたわたしは、以後ずっとそう考えるようになった。とても特異な蜃気楼であるのは間違いない。というのも、この蜃気楼は自身を知覚しつつも、むしろ自身が蜃気楼を知覚しているとは信じていないのだから——だが、どのみちあくまでもそれは蜃気楼でしかない。つまり、「意識」と呼ばれる捉えどころのない現象は自力で身体を起こし、何も無いところからいきなり現れ、目を凝らして見ようとすると、また何もないところへ消えてしまうように思えるのだ。

生きているとは、人間であるとは、意識があるとはどういうことを理解しようと熱中するあまり、捉え難い自分の思考を紙の上にとどめなければ、永遠にどこかへ消え去ってしまうという気持ちに駆られたわたしは、新進の哲学者を二人思い浮かべてやや皮肉交じりに「ソクラテス」、「プラトン」という名前をつけ（本物のソクラテスとプラトンについては、ほとんど何も知らないが）、その二人に会話をさせてそれを書き留めた。その会話はわたしが初めて書いたまともな文章だったかもしれないが、いずれにしても、わたしはその文章を誇りに思い、決して手放さなかった。二人の偽者の古代ギリシャの哲学者たちの会話を読み返してみると、不明瞭なのは言うまでもなく、とても稚拙で下手くそではあるが、それでもプロログとして本書に取り入れるべきだとわたしは判断した。多くのアイデアを示唆してくれる可能性があり、本書全体を楽しく刺激的な雰囲気にしてくれると思ったからだ。

谷底に向かって叫ぶ

それから一〇年ほど過ぎた頃、わたしは最初の本の執筆を開始した。「ゲーデルの定理と人の脳」というタイトルのを考えていたその本が、包括的なゴールとして目指したのは、人の自己という概念と意識の謎を、ゲーデルの驚異的な発見である壮大な自己言及構造（のちに「不思議の環」と命名）に関連づけることだった。しかもそれを、大胆な設計によって自己言及を徹底的に追放していた不落の城塞の真ん中で行うのだ。意味をもたない記号という基質からゲーデルが奇跡的に生み出した自己言及と、命のない物質からなる基質に奇跡的に出現した自己と魂には、明らかな類似点があると知ったわたしは、そこに「私」という感覚の秘密があると確信し、それを受けて『ゲーデル、エッシャー、バッハ』⁽²⁾ (Gödel, Escher, Bach) が生まれた（このような受けのいいタイトルもつけられた）。

一九七九年に刊行したこの本は、これ以上は望めないほどの成功を収め、わたし自身も本のおかげでほぼ順調に人生を送ってきた。しかし本が人気を得る一方で、わたし自身はGEB（わたしがいつもGEBと呼ぶので、やがて一般にそう言われるようになった）の根底にあるメッセージがほとんど注目されていないことずつと悩まされていた。読者があの本を好む理由は千差万別だが、中心にある存在理由^{レゾンデートル}を理由とする人はいたとしてもほんのわずかだ。歳月が流れ、新たな本を発表して、核となるそのメッセージを示唆したり説明をつけ加えたりしたが、わたしがGEBで本当に伝えたかったことはあまりわかってもらえなかったようだ。

一九九九年、GEBが刊行二〇周年を迎えるにあたり、版元のベシック・ブックスから、二〇周年記念版を出版するので序文を書かないかと提案を受けた。なるほど、と気をよくしたわたしは、その提案に応じることにした。そして序文に、GEBに関する苦労話やその他のさまざまな話を盛り込み、この本の受け止められ

方に対する不満を連ね、「まるでわたしは、心の奥底で温めてきたメッセージを空っぽの谷の底に向かって叫び、誰にも自分の言葉を聞いてもらっていないかったようなものだ」と締めくくった。

そして二〇〇三年のある春の日、わたしは一通のeメールを受け取った。差出人は二人の若い哲学者、ケン・ウィルフォードとウリア・クリーゲルで、意識の「自己言及主義的理論」と二人が名づけたテーマに関してアンソロジーを編むので、章の一つ受け持つてもらえないかという話だった。二人は、ぜひ参加してほしいと言いつつ、わたしが件の序文に記した嘆きを取り上げて、これがきっかけで事態が好転するかもしれないと提案した。わたしは、彼らが科学的見地からわたしの核となるメッセージに興味をもってくれたことを心から喜び、彼らの温かさに心を動かされ、確かにその書籍への寄稿は、対象とすべき適切な読者——心の哲学者——に、自己と意識に関するわたしの考えを改めて明確に伝える大きなチャンスではないかと考えた。よって、彼らの誘いを受けるのは、さほど難しい決断ではなかった。

雄大なドロミーティから落ち着いたブルーミントンへ

受け持った章の執筆を始めたのは、イタリアのドロミーティ山地にある村、アンテルセルヴァ・ディ・メッツォの簡素で静かなホテルの一室だった。石を投げれば、オーストリアとの国境を越えて飛んでいきそうな場所だ。素晴らしい環境に触発されて、一五ページのうち一〇ページを猛スピードで書き上げ、早くも山を越えたような気になっていた。やがてインディアナ州のブルーミントンに帰ることになったが、引き続きこつこつと執筆を続けた。

ところが、書き終えるには思ったよりもはるかに長い時間がかかり（読者のなかには、「いつでも予測以上

の時間がかかるものである——ホフスタッターの法則を計算に入れても」というホフスタッターの法則^③の典型的な例だと認める人もいるかもしれない)、しかも出来上がった文章は上限の四倍の長さになってしまった——最悪だ！ けれども、ようやく原稿を受け取ったケンとウリアは内容をたいへん喜び、わたしの失態をあり得ないほど大目に見てくれ、その作品をどうしても掲載したいがために、とびきり長い章になってみてもかまわないとまで言い、とりわけケンは、原稿の長さを半分程度にする作業を手伝ってくれた。彼にしてみれば、本当に好きだからこそやれた仕事だろう。

一方わたしは、執筆の途中で、自分が書くこうとしていることは一つの章には収まり切らないと考えるようになった——一冊の本にすべきではないだろうか。そうすると、一つのプロジェクトから二つの作品が生まれることになる。そのとき書いていた章には、心の哲学者トマス・ネーゲルが意識の謎について記した論文「コウモリであるとはどのようなことか」^④にちなんで、「不思議の環であるとはどのようなことか」とタイトルをつけ、書籍となる方にはもつと短くて楽しい『わたしは不思議の環』というタイトルをつけた。

ケン・ウィルフォードとウリア・クリーゲルのアンソロジー『意識に対する自己表象的アプローチ』(*Self-Representational Approaches to Consciousness*) は二〇〇六年の春に刊行され、二章分のページを割いたわたしの小論は、最終パート「哲学を超えて——意識と自己言及」(“Beyond Philosophy: Consciousness and Self-Reference”)のこれまた最後に収められた(なぜ「哲学を超えて」と題するパートに入る資格があるのかは、わたしの理解を超えているが、いずれにしてもその処遇は気に入った)。そのような、晴れがましくもかなり専門的なところに配されて、一連のわたしの考えが誰かに大きな影響を与えたかどうかはわからない。本書では、そのときの考えを十分に練り上げ、よりわかりやすく肉づけしたが、哲学者にも門外漢にも、若者にも老人にも、専門家にも初学者にも、あらゆる人々に届いて、自己と魂に関する新たなイメージを与えられたらと

心から願う(もちろん環^{ループ}に関しても!)。いずれにしても、わたしはケンとウリアに多大な恩義を感じている。彼らが火つけ役となってくれたおかげで本書の構想を思い立ったばかりか、執筆中にも大いに励ましてくれたからだ。

かくして、ほぼ四五年がたった今(なんてことだ!)、わたしは一周して振り出しに戻り、魂と自己と意識について再び書き、ティーンエージャーの頃に初めて経験したのと同じ不思議と気味の悪さに食らいついている。一〇代のわたしは、自分を自分たらしめるものがもつ、恐ろしくも素晴らしい物理性に震え上がり、釘付けになっていた。

著者と読者

本書は、このようなタイトルをつけはしたが、わたし自身ではなく、「私」という概念について書いてある。したがって、わたしについてとまったく同様に、読者であるあなたについての本でもある。『あなたは不思議の環』と名づけてもよかつたくらいだ。とはいえ本来ならば、本書の主題と目的をより明確に提示するためには、『私』とは不思議の環』とすべきだったかもしれない——だがそれでは、このうえなくみつともないタイトルにならないか。それならば、『わたしは不首尾だわ』とでもした方が良かったです。

いずれにしても本書は、「私」とは何かという古くて重要な問題を中心に扱っている。では、その読み手は誰か? わたしとしては、いつものように教養ある一般読者に向けて執筆するつもりだ。専門家向けに本を書いたことはほぼ一度もなく、おそらくそれは、わたし自身が大した専門家ではないからだろう。いや、撤回しよう。これではフェアでない。今この時点において、わたしはかれこれ三〇年ばかり大学院生たちと共に、ア

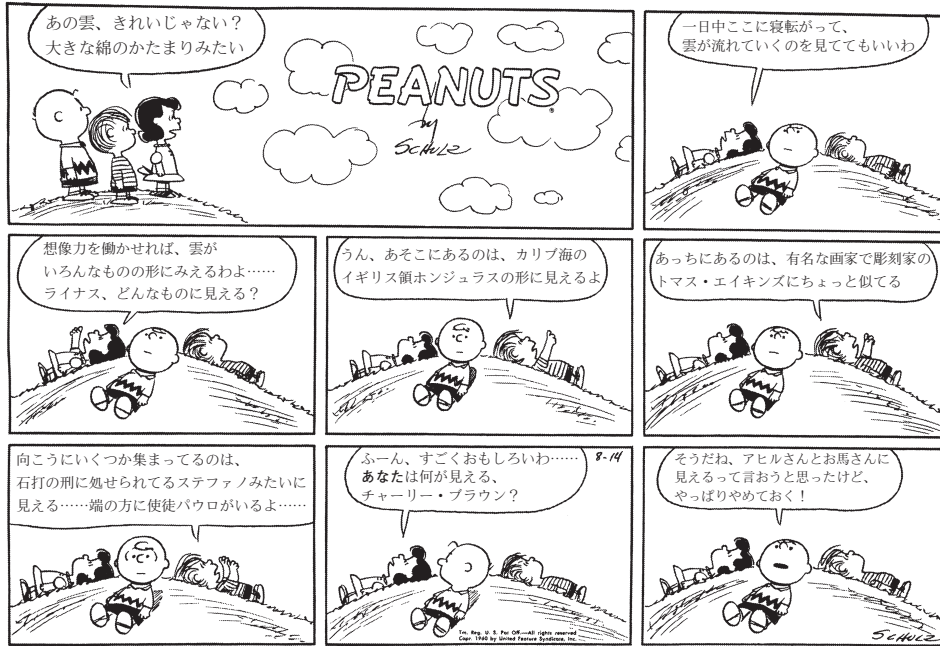
ナロジー生成や創造性の計算モデルについて研究を重ね、あらゆる種類の認知の誤りを観察して分類し、カテゴリー化とアナロジーに関する例を収集し、物理学と数学におけるアナロジーの中心性について調査し、ユーモアのメカニズムを熟考し、概念はどのように生まれ記憶はどのようによみがえるのかを思索し、単語、熟語、言語、翻訳等のあらゆる側面を検証してきた^⑤——そして同時に、この三〇年余りで、ものの考え方や世界の捉え方に関する多くのテーマでセミナーを行ってこきた。

そう、つまりわたしは専門家の端くれだ——思考について思考することを専門としている。前にも書いたが、このテーマは一〇代の頃からずっとわたしの心を燃やし続けてきた。そうしてわたしが得た確固たる結論の一つは、われわれは考え事をするときに、いつも自分の過去から自分の知っていることを探し出して、それに関連づけるので、多くの事例やアナロジーや比喩が利用できる場合、抽象的な一般論に陥らない場合、地に足がついた具体的に簡潔な言葉を用いる場合、自身の体験を率直に語る場合には、情報伝達がうまくいくということだった。

お馬さんとわんちゃん信仰

もう何年も、わたしは「お馬さんとわんちゃん」式と名づけた自己表現方法を採用してきた。その名の由来はかの有名な漫画『ピーナッツ』のあるエピソードだが、ここにそのエピソードを再掲しておく。

最後のコマでチャーリー・ブラウンが感じているようなことを、わたしもよく感じる——自分の考えは「夢物語」でしかないと思って、一人ではつの悪い思いをするのだ。読者のなかには、わたしが極端な抽象を大いに楽しみ飽きもせずに追求すると思う人がいるのは承知しているが、そのようなイメージは甚だしい誤解だ。



わたしはそのイメージとは正反対の人間だし、本書を読めばそれがはっきりすると期待している。チャーリー・ブラウンがつぶやいた心を打つ台詞をなぜ間違って覚えていたのかは皆目見当がつかないが、いずれにしても、やや変形させた「お馬さんとわんちゃん」をわたしがスピーチの中で使うようになったのはかなり前のことで、以来良くも悪くも、このフレーズはわたしの教授法、講演法、執筆法を語る際の定番となった。

『ゲーデル、エッシャー、バッチャ』が成功したこともあって、わたしは教鞭をとっていた二つの大学——インディアナ大学（約二五年間）とミシガン大学（一九八〇年代に四年間）——から相当な自由を与えられるという幸運に恵まれた。大学側の寛大な配慮のおかげで、論文を書かねば抹殺されるという馬鹿げたプレッシャーや、助成金狙いの研究をしなければならぬというさらに恐ろしいプレッシャーにさらされずに、自分の雑多な興味を追いかける贅沢を得られたのだ。専門誌に

次々と論文を発表するというような研究者の標準的なルートを、わたしはたどってこなかった。確かに、紙に記した「リアルな」論文はいくつか発表しているが、わたしはもっぱら書籍で自分の考えを述べてきたし、常にできる限り明瞭に語ることを目指してきた。

明瞭かつ平易で具体的であることが、わたしにとってはある種の宗教となり、必ず守るべき指針となった。幸い、アナロジーや比喩、事例を評価してくれる人はいへん多く、専門用語が比較的少ないことや、ついでに言うならば一人称で綴ることも喜ばれている。いずれにしても、わたしはそのような読者のためにも、これまでの著書と同じくわたしなりの指針を守ってこの本を執筆する。わたしの読者層には、専門外やアマチュアの人はもちろん、心の哲学の専門家も多く含まれているはずだ。

本書に一人称のエピソードが多く含まれているとしたら、それはわたしが自分自身の人生経験に心を奪われているから、あるいは自分の人生経験が重要だと思い込んでいるからではなく、一番よく知っているのが自分の人生だから、そこに多くの人生に共通すると考えられる典型例があれこれと含まれていると思うからだ。抽象的な思考もエピソードを通じて接すれば、誰もがよくわかるはずなので、わたしは難解で抽象的な考えをわたし自身の人生という媒体を通じて伝えてみたい。もっと多くの思想家が、一人称を使って執筆してくれればよいのだが。

本書を通じて自分の考えが哲学者たちに伝わるのを望みはするが、哲学者のような書き方はするまいと思っている。わたしには、多くの哲学者は数学者と同じで、自分たちの正しさを実際に証明できると信じていて、そのために非常に厳密で専門的な言葉を多く用い、場合によってはありとあらゆる反論を想定して、その反論に反論しようと準備しているように見える。そのような自信には敬服するが、わたしはそこまで楽観的ではなく、もう少し宿命論的だ。わたしは、何かを哲学で完全に証明することは不可能だと考える。説得を試みるく

らいはできるかもしれないが、せいぜい自分が支持する立場にとっても近い人たちを説得するのが関の山だろう。わたしはややマイルドな類の宿命論に立った結果、自分の考えを伝えるには、厳密性ではなくアナロジーや比喩を基本とする戦略をとることにした。したがって、本書は巨大なサラダボウルとなり、アナロジーや比喩が山盛りに入っている。わたしの比喩サラダをおいしく食べてくれる人もいれば、あまりにも……そう、あまりにも比喩的だと感じる人もいるかもしれない。でもわたしは、親愛なる食者であるあなたにとって、好みの味つけとなっていることを切に願っている。

最後にとりよめのない所感を少し

わたしはアナロジーをとっても真剣に捉えているので、「サラダ」の中の膨大な数のアナロジーを本書の索引に載せるのになんり手間をかけた。索引では、各事例を二つの大きな項目にまとめている。一つは「重大なアナロジー」、もう一つは「出まかせの使い捨てアナロジー」だ。こういうおかしな分け方をしたのは、わたしが採用したアナロジーの多くは考えを伝えるのに重要な役割を果たすが、一方で、なかにはただのスパイスとして用いたものもあるからだ。とはいえ、ここでもう一つだけ言っておかねばならない。突き詰めて言えば、本書（あるいはどんな本でも）に記される思考は、ほぼすべてがアナロジーなのだ。なぜなら思考は、物事を他のいろいろな存在の寄せ集めとして認識することを伴うからだ。したがって、わたしが「同様に」とか「対照的に」と書けば、そこにはアナロジーが暗に存在し、わたしが何らかの単語や表現（「サラダ」、「貯蔵庫」、「結論」など）を選べば、そのたびにわたしの人生経験の貯蔵庫にある何かに対応するアナロジーが生まれている。結論を言えば、本書のあらゆる思考は、索引の「アナロジー」の項目に収めることができる。だが、そ

ここまで細かくやるのはさすがに遠慮しておいた。

当初この本は、GEBの核となるメッセージを精製した改作にするつもりで、形式的記法はあまり、というか一切使わず、禅だとか、分子生物学だとか、再帰だとか、人工知能だとか、プーシキンのように気ままにありとあらゆる話題を取り上げたりはするまいと考えていた⁽⁸⁾。言い換えれば、今回本書に記す(記し直す)ようなことは、すでにGEBやその他の本では存分に述べたと思っていたのだが、驚いたことに、いざ書き始めてみると新しいアイデアが足元のいたるところから芽生えてきた。わたしは安堵し、この新しい本は以前の(何冊かの)本のただの焼き直しではないという心境になった。

GEBが成功した要因の一つは、普通の章と対話篇を交互に並べたことにあるが、あれから三〇年が経過した今、同様のことをして自分自身の物真似をするつもりはない。わたしの考え方はあの頃から変化を遂げており、この本には現在の考えを反映させたいと思う。けれども、執筆が終盤に近づいてくると、自分の考えを心の哲学における周知の考えと比較してみたくなり、「懐疑的な人はこう応じるかもしれない……」などと書いてみた。そうした言い回しを使ってみてわかったのは、わたしの頭にはいつの間にか自分自身と、わたしに懐疑的な仮想上の読者の対話が生まれているということ、だからこそ、おかしな名前のペアのキャラクターを作って紙上で話をさせ、それが本書でも特に長い章となった。あの章は大笑いしてもらうつもりで書いたわけではないが、それでも、時にはやりと笑ってもらえるのではないかと期待している。対話篇のファンは喜んでほしい——本書には対話篇が二度登場する。

わたしは長年、形式と内容が相互に良い影響を与え合う状態を好んできたが、本書も例外ではない。過去の何冊かの著作と同じく、本書でも、自ら細部にいたるまで活字を組む機会を得て、各ページの見た目の美しさの探求が自分の考えを伝える文章に影響を与えるように考慮した⁽⁹⁾。それでは本末転倒だと思う人もいるだろう

が、どんな人でも、形の美しさに注意を払えば文章も向上するとわたしは考える。本書を読めば、知的な刺激を受けられるだけでなく、心地よい視覚体験もできるものと思っている。

ユースフルなユースフルネス

GEBは一人の若者が書いた本だ(構想を練り始めたときわたしは二七歳で、第一稿を書き上げたのが二八歳だった——すべて罫線入りの紙に手書きした)。わたしはその若さですでに、相応あるいは不相応な苦しみ、悲しみ、善悪に関する内省を経験していたが、あの本には人生のそうした側面はさほど表れていなかった。一方で本書は、苦しみや悲しみ、内省についてさらに熟知した人間が記しただけに、人生の厳しい側面にもたびたび触れている。それは、人が歳を重ねた印でもある——書いたものがより内向きに、内省的に、あるいは思慮深く、もしかすると悲しげになるのだ。

わたしはずっと、アンドレ・マルローの有名な小説『人間の条件』(La Condition Humaine)の詩的なタイトルに感銘を受けてきた。この心を揺さぶられる表現については、人それぞれにさまざまなことを思い浮かべるだろうが、わたしとしては、『わたしは不思議の環』(I am a Strange Loop)というタイトルが、「人間の条件」とは何かを説明する会心の表現ではないかと考えている。

物理学者で著述家でもあるジェレミー・バーンスタインがGEBに寄せてくれた推薦文は、わたしのお気に入りの一つだが、彼はこんなことを書いている。「この本には、若々しい活力と素晴らしい才気があふれている……」。何と嬉しい言葉だろうか！だが残念ながら、この嬉しい誉め言葉はどこかで取り違えられてしまっている。今では何千冊と出回っているGEBの裏表紙で、バーンスタインは「役に立つ活力……」と宣言している。

I AM A STRANGE LOOP

「若々しい」活力と比べると、あまりにも残念すぎる！ とはいえ、新しい本書は、若くはない落ち着いたスタイルゆえに、いつかどこかで誰かに「役に立つ」活力があると言われるかもしれない。本というものは、もっとひどいことだって言われかねないけれど。

さて、そろそろ自分の本について語るのはやめにして、本自身に語ってもらおうとしよう。興味を引くことや目新しいこと、そして、もはや若々しくはないにしても役に立つ活力が詰まったメッセージを受け取ってもらえたらと思う。本書を読んで、人間であるとはどういうことか——いや、むしろ、**存在する**とはどういうことかを、新たにじっくりと考えてもらえたらありがたい。そして、本書を読み終えたとき、あなたが、自分もまた不思議の環であると想像できていれば嬉しく思う。それが、わたしにとってこのうえない喜びとなるだろう。

インディアナ州ブルーミントンにて

MMVI
12月